

大東急記念文庫蔵『人天眼目批郤集』について

——『人天眼目抄』における位置づけを中心にして——

飯塚大 展

はじめに

道元は『正法眼蔵』仏道の巻において、五家の宗派を設定し、それぞれの家風を機関に代表させ体系化すると共に、それらを一つの範疇として分類した中国禪宗の綱要書である『人天眼目』を批判している。

「雲箇水箇、真箇の参究を求覓せんは、切忌すらくは五家の乱称を記持することなかれ、五家の門風を記号することなかれ。いはんや、三玄三要・四料揀・四照用・九帯等あらんや。いはんや三句・五位・十道真智あらんや」。(岩波文庫『正法眼蔵』(三)二三頁)

「後来智聡といふ小兒子ありて、祖師の一道兩道をひろひあつめて、五家の宗派といひ、『人天眼目』となづく。人これをわきまへず、初心晩学のやから、まこととおもひて、衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、

駒澤大學佛教學部論集第二十七號 平成八年十月

人天の眼目をくらますなり。いかでか瞎却正法眼蔵の功德あらん。かの『人天眼目』は、智聰上座、淳熙戊申十二月のころ、天台山万年寺にして編集せり。後來の所作なりとも、道是あらば聴許すべし。これは狂乱なり、愚暗なり。参学眼なし、行脚眼なし、いはんや見仏祖眼あらんや。もちゐるべからず。智聰といふべからず、愚蒙といふべし。その人をしらず、人にあはざるが言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず。しりぬ、人をしらずといふことを」。(同右三八〇九頁)

川僧慧濟はこの道元の言説をどう受けとめたのであろうか。

「師語話而云、大慧ノ末ヘノ批判ニ、明月前ハ是黒、不言黒、又老婆頭白、不説白、而言老婆白在其中。是ヲ見テ、永平和尚ハ、此ハ是レ人天ノ盲目ナリト云テ、抛擲ト云云。批却ワ、大慧ハ、天下ノ大善知識、豈言ニ如是、

別人ノ語欵ト云々」。(東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』二七〇頁)⁽¹⁾

川僧は『人天眼目』における大慧の解釈に対する道元の批判と位置づけているようである。意図的かどうかは判然としないが、問題の転嫁が作されているわけであり、少なくとも道元の上記のような発言をふまえた上での川僧の叙述と考えてよいだろう。⁽²⁾

因みに『人天眼目』を道元同様に批判した禅者に、大燈国師宗峰妙超がいる。

「開山ハ、人天眼目ヲ人天盲目デコソアルト仰ラレテ、不御覽、又傳灯録ハ、目クラ僧ヲ多ク載タト仰ラレテ、御嫌アリ。談義ナドハセズトモ、ト仰ラレタ。大照禪師モ如レ此仰セラレタ也」⁽³⁾。

そして、ここに言う大照禪師とは養叟宗頤のことであり、東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』に識語を記している春浦宗熙の師に当たる。⁽⁴⁾

さて、道元の『人天眼目』に対する批判にも関わらず、道元の法孫は極めて早い段階から『人天眼目』への参学が始まっている。どちらかと言えば積極的に『人天眼目』において曹洞宗の宗風を代表するものとして設定された五位の思想に注目していったと云える。本稿で取り上げる大東急記念文庫蔵『人天眼目批郢集』は、元亨元年（一一三三）の成立とさ

れ、『人天眼目』全体に対する注釈書としては、恐らく最も古い物の一つと考えられる。⁽⁵⁾ 又『人天眼目批郢集』の後世への影響は、具さに所謂『人天眼目川僧抄』の中に看取できる。一般に曹洞宗における五位研究の嚆矢とされるのは、『頤訣耕雲注種月攬撫稿』を始めとする傑堂能勝・南英謙宗の一連の著作であるが、五位に関する注釈の歴史において孤立した感がある。『人天眼目』の注釈の歴史の一端を垣間みようと言うのが、本稿の目的ではあるが、同時に中世における五位研究という視点からも考えうるのではないかと考えている。それは他の語録抄、例えば『自得懷暉語録抄』⁽⁶⁾、『切外録抄』⁽⁷⁾、『天童小参抄』⁽⁸⁾、『古今全抄』⁽⁹⁾等、或いは本参、⁽¹⁰⁾切紙と言った資料の分析を待たなければならぬが、とにかく中世の抄物を解釈する際には五位の理解が不可欠である。⁽¹²⁾

『人天眼目批郢集』について

先ずその書誌について若干考察してみたい。『大東急記念文庫貴重書解題佛書之部』(九七頁)に次のように見える。

「197 人天眼目批郢集

応永二十一年寫 一冊 二九五

應永二十一年寫。判紙本。裏打改装。每半葉十四行書寫。字面の高さ約六寸八分。前集と後集とに分れ、巻末に、

人天眼目集者、允祖教綱格、而參禪標準、達(幸カ)

逢指南、忽知迷方、忽仍隨喜捨家財、命工鏤梓、以

壽其傳、元享甲子^(ママ)陽節相州濱部性圓謹誌^(重)

の原刊語がある。この種の五山版は残存が見當らないが、その後

應永廿一年龍集甲午仲春廿又五日夜

於惠日永明智覺庵宗鏡軒側竹庵子書畢(古朱印記、不明)

の書寫識語があり、卷首尾に「善慧軒」の黒印記を捺す。新たに古表紙を附す。

上記の解題において問題にさるべきは、卷末の識語をどのように解するかにある。更に解題においては触れられていないが、序文との関連をどう見るかが問題となる。この点に関しては後述するが、私見としては、『人天眼目批卻集』そのものの開板の際の原刊語であると考えたい。

又、『新纂禪籍目録』に次のように見える。

「人天眼目批卻集 二卷・冊 寫(應永二二)竹庵筆 大

東急 此書ノ選述ハ元年春(ママ)洞庵ニテ成リシモノ、

上・下兩卷末ニ絶筆ノ偈各一篇ガアル、今ノ書名ハ莊子

庖丁云、依乎天理批大卻ニヨツタモノ、主トシテ曹洞宗

部ノ批卻ヲナシテ居ル」。

『新纂禪籍目録』では、成立を元亨元年として序文を参照し

ている。

又、納富常天氏は『金沢文庫資料の研究』「東国仏教における出版文化」(八五頁)の中で次のように指摘している。

「一三〇三 嘉元元年 人天眼目 淨智寺桂堂瓊林 新纂禪籍目録

一三二四 元亨四年九月九日 人天眼目批卻集 相州

濱部性円 神奈川県史古代中世編二三九一」。

鎌倉時代における出版活動は来日僧やその周辺の禅僧によって担われていたとされるが、上記の記事はその一端を示す物ではないかと考える。

以下『人天眼目批卻集』の成立と開板について略述したい。序文には次のように見える。

「人天眼目批卻集并序

觀物初云、人有其書、徒珍蔵如左券、魚魯之殊、差之不理。桂堂叟云、雖然趙宋全盛之時、南詢衲子傳寫、而非無烏焉成馬之誤。乃知斯集錯也者、古今所病矣也。愚乘閑而讀焉。洞上一宗、有舛訛尤甚也。豈非世路以多岐亡羊、學者以多途喪志乎哉。聿已而不能、至於五位君臣、與三種墮、自覺頗稱乎古來之美焉。雖然呈孟浪解、亦望千万之一有裨於祖教、所謂涓滴足海、予之志也。皆元亨辛酉、佛誕生之日、書桐庵」

この序文では、物初大觀の跋語と桂堂瓊林の刊語とをあげ

た後、その執筆の動機を曹洞宗に関する記事の誤りを正すことにあるとしている。これによれば、『人天眼目批郢集』は元亨元年四月八日に成立したことになる。又、上述の『大東急記念文庫貴重書解題 佛書之部』に言う原刊語とする一文も、元亨四年に至り、本書を開板するに際しての識語と考えてよいのではないだろうか。

次に書写した筆者について考察してみたい。

「應永廿一年龍集甲午仲春廿又五日夜

於惠日永明智覺庵宗鏡軒側竹庵子書畢(古朱印記 不明)」

本書は応永二十一年に書写された物であり、他に類書が知られていない現状においては、貴重な資料であることは言うまでもない。ここに言う「惠日」とは惠日山東福寺のことであり、「永明」とは藏山順空を開祖とする永明院を指し、「智覺庵」は大道一以を開祖とする塔頭である。「竹庵子」とは、恐らく臨濟宗聖一派に属する竹庵大縁ではないかと考えている。竹庵は貞治元年(一三六二)に生まれ、永享十一年(一四三九)四月二十三日に示寂している。東福寺百十四世であるほかに、淨妙寺、建仁寺、天竜寺、南禅寺に歴住している。文筆に長じ、『詩学大成』等に精通していたとされる。

次に本書の構成について若干考察してみたい。本書は、一〇二十五丁裏が前集、二十五丁裏〇四十三丁表が後集である。その項目を挙げれば、以下の通りである。

「人天眼目批郢集并序

人天眼目批郢前集

○臨濟宗

(1) 論四料揀 (2) 論三種師子 (3) 論汾陽十八問

(4) 論法蔵帯 (5) 論南堂十門 (6) 論門庭

〔○雲門宗〕

(7) 論要訣

○曹洞宗

(8) 論五位君臣旨訣 (9) 論五位君臣旨訣前番圖

(10) 論五位君臣旨訣後番圖 (11) 論五位名件 (12) 論偏正五位序 (13) 新出偏正五位圖 (14) 論汾陽五位頌 (15) 論五位賓主 (16) 論功勳五位基 (17) 論向 (18) 論奉 (19) 論功 (20) 論共向 (21) 論功々

(22) 論五位君臣圖真偽 (23) 論功勳五位圖偽 (24) 論王子五位題 (25) 論誕生王子 (26) 論朝生王子 (27) 論内生王子 (28) 論駁雜過 (29) 論寂音内外紹

(30) 論三種墮 (31) 論正命食 (32) 論三滲漏序

(33) 論三路接人 (34) 門庭

○瀉仰宗

(35) 論三種生

○法眼宗

(36) 論六相義

○雑録

(37)論三身已下徒費牋 (38)論五問中楞伽經 (39)

論五問中台教祖意向別

人天眼目批卻後集

△絶筆偈

〔臨濟宗〕

(40)論四料揀〈續前讀之〉 (41)論三句 (42)論三

種根器 (43)論三種師子〈續前讀之〉 (44)論汾陽

十八問〈讀前讀之、法藏帶相例〉 (45)論法藏帶

(46)論□堂十門〈讀前讀之〉

○曹洞宗

(47)論偏正五位 (48)論偏正五位頌 (49)□偏正五

位圖 (50)□碧巖集解 (51)論偏正五位□ (52)論

體用說〈前集門庭有之〉 (53)論五位君臣有其五例

(54)大陽玄頌 (55)君臣五位□圖 (56)論君臣五位

偽圖 (57)論體用 (58)論翠巖□位答話

○瀧仰宗

(59)論鏡智出三種生 (60)論白淨頼耶 (61)論頼耶

三細同異

○雑録

(62)論拈華 (63)五位君臣試圖

△絶筆偈

刊語

書写者識語

上記のように、本書の主たる論点がどこにあるかは容易に察しがつくと思う。それは序文にあったように、曹洞宗の誤り、特に五位に関するものの訂正にあった。具体的には別稿において本書の翻刻を行ったので参照していただきたい⁽¹³⁾。又論題にも掲げたように、所謂『人天眼目川僧抄』との関係で言えば、引用される頻度は高いと云える。例えば、(29)論三種値は全文東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』に引用されている⁽¹⁴⁾。従って、川僧は『人天眼目』に関する注釈書「抄云」「抄出」「注云」として引用されるものと共に、『人天眼目批卻集』を座右において講義したものと思われる。

五山における『人天眼目』の受容について

義堂周信の『空華日用工夫略集』応安三年八月四日の条に、「晩に祥光庵を過ぎり、九峰を訪う。留められて夜話す。手に人天眼目を披き、疑処に遭う毎に、挙して以て問わる。余略して之れに答う」。

と見える。又、天英周賢は桃源瑞仙の『人天眼目抄』と『碧巖録抄』を梅室周馥に貸与しており、又桃源自身も月翁周鏡の求めに応じて、『人天眼目抄』を貸与している⁽¹⁵⁾。(文明八年正月)

「勝智主翁月翁書有り、余の記する所の人天眼目倭抄を借せらる」(『百衲襖』十八)

桃源の抄が基づいたのは、建仁寺清隱庵の正宗□雅の講義を聴講した際の物である。この桃源の『人天眼目抄』は所在不明であるが、その逸文が雪岑津興の『頌詩』(東福寺靈雲院蔵)に見える。

「人天眼目桃源抄云、達磨初入魏時、洛中諸士夫、皆持_ニ儒典_一往_テ詢_ニ問_一之。磨曰、不_レ識_レ字、但能鼻嗅_ニ通_一。諸士以論語令嗅、嗅了磨云、説_ニ是非_一底文字、次以_レ春秋令_レ嗅。磨曰、次以_レ周易令_レ嗅。乃曰、此_ハ天書、吾_カ西国無_レ之。吾_カ西国雖_レ無_レ之、以_レ一音一字函_ス之。其一音即如来_ノ出音。」
上記の梅室であるが、『蔭涼軒日録』長亨二年十二月十六日条に

「大亨妙亨—玉潭中堪—梅室」

と言う天竜寺華藏院の易の家伝に連なっており、易学に尤も長じていたとされる。興味深いのは、川僧自身もこの伝授に連なっていることである。

「語話而云、易ヲ傳事ハ、予矣天ヨリ傳。元會法師ヨリ嵯峨ノ開山弟子大綱傳、大綱ヨリ玉潭伝、玉潭ヨリ位天傳ト云云」(東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』二五一頁)

川僧とほぼ同時代に活動した桃源瑞仙は易学の講義を長年に亘って行い、『百衲襖』を選述している。又清原家の抄もこ

の前後の頃より盛んに行われている。京鎌倉の五山及び足利学校における易学の研究の伝統は、林下曹洞宗にも流入していたと考えられる⁽¹⁶⁾。新注と言われる宋学の導入と抄物作成おける位置づけについては、とても手に負える問題ではないが、一応今後の課題としたい⁽¹⁷⁾。

又、『臥雲日件録抜尤』に次のように見える。

「廿日、……三會院主(東岳澄听)話の次いで、天皇・天王悟禪師のことに及ぶ。東岳院に入り、一小冊を取り来たつて示さる。中に人天眼目後序有り。岳曰く、現に流布するところの新旧の二本、此の序無し。先師常光国師(空谷明應)の書籍中に、自ら此れを書すと云云。」(寛正元年三月廿日)

「四日、松雪(全杲)来たつて問う。話の次いで、祖師の機縁に及ぶ。松雪曰く、人天眼目、奪境不奪人の著語に曰く、壇を築きて将を拝す。然るに築壇は是れ境なり、如何が奪境と道わん。之れを解して曰く、壇は相を拝するのみ、と。之れを取らず。然らば則ち奪境の意なり。又曰く、大慧の竹篋背触、著語に曰く、甕中に鱉を走らす。此の著語解し難し。然るに此れ只一竹篋を打すなり。一撃もて其の甕を撃破せば、即ち中にある鱉走出すべきなり。言に背と曰い触と曰い、皆な一時に撃碎し了れり。此れ即ち悟処なり。又甕中に何ぞ曾て鱉を走却

するの話有らんや。蓋し悟処を立てざるの意なり。又た曰く、乾屎橛、蓋し此の方諺は所謂る犬糞の類なり。或は乾屎橛の三字、悉曇の声を以て此れを解するは非なり。又无位の真人、一靈の心性を言うのみ。面門より出入して、六根六境、処として涉り入らざる无きを言う。然るに、一隅に滞らず、此れ即ち无位の謂いなり。凡そ一靈の真性、胞胎を仮らず。然れば、先徳も此の意なり。針を以て身を刺し、則便ち痛みを覚ゆ。此れ即ち一靈皮袋、々々一靈、二物に非ざるなり。以上、林下の説」。(寛正五年五月四日条)

上記によれば、空谷明應に人天眼目の手沢本が存したこと
が窺われ、五山の禅林の中にも寛正五年の段階で林下の僧に
よる解釈が参考になされていた事が分かる。『人天眼目批郚集』
も亦た五山僧によって伝写されていることから、五山叢林で
作成された『人天眼目抄』に引用されている可能性があり、
桃源の『人天眼目倭抄』を含めて、資料の収集に当たりたい。
五山における『人天眼目』の受容を考える上で、いわゆる
五山版の開板の考察は本来なら欠かせないが、今回は準備不
足のため断念せざるを得ない⁽¹⁸⁾。又、空谷明應の手沢本の存在
が知られるように、五山版や書写本に対する書き込み注のあ
る諸本が存在する⁽¹⁹⁾。これらはある意味で『人天眼目抄』と言え
るものであり、この点についても今後研究を進めたいと思う。

林下曹洞宗における『人天眼目』の受容について

本稿では所謂『人天眼目川僧抄』をもうひとつの軸として
考察を進める便宜上、川僧抄に先行する抄と川僧抄の影響を
受けて成立した抄とについて論述してみたい。

第一に取り上げるべきは、『一華開五葉』⁽²⁰⁾(六地藏寺蔵)で
ある。本書はその内題に「峨山和尚人天眼目代」⁽²¹⁾とあるよう
に、『人天眼目』をテキストとした代語集である。資料の批
判的検討は今後を待たなければならぬが、ここでは川僧抄
に先行する抄として紹介したい。以下、曹洞宗五位関係の部
分を挙げる。

「曹洞宗。君臣五位。君位。子時^{ネノトキ}當正位。臣位。大功不
立^セ。寶^ハ、柴扉^{サイヒ}草自深^{ラシ}。君視臣。徳不^ス孤^{ナラ}。有^リ隣。又、此理
若分^セハ全^ク無事、体用^{ソノ}何妨^{ケン}三分^ト与^ト不分^ト。臣向君。四相^{ハイハン}排斑^ハ、
立^チ、凝^ネ情望^ラ聖容^{ムセイヨウカ}。君臣合道。臣主相亡^{ソノ}古殿寒^{ナレ}。へ大功ハ
智不到^ノ功也^也」。

●正中偏。半夜牧童敲月戸。○偏中正。夜月有^テ輝^キ含^ミ古
渡^ヲ、白雲无^ク雨^{ツツム}裏^レ秋山^ヲ。●正中來。焰裏^ニ結^ヒ寒氷^ヲ、々河
發^ス紅焰^ヲ、月船不^レ犯^ス東^ノ西^ノ岸^ヲ。當機不^ニ回^ル互^ニ、觀面^ニ无^ク先後^一。
○兼中至。風化无^ク傷^ム的^ノ意^ヲ玄^ニ、光中^ニ有^テ路^ノ天然^一一^ノ靈^{ナリ}。●兼
中到。仏祖未^レ生^ク空^ノ劫^ノ先^ニ、偏正^テ曾^テ不^レ隨^ヒ有^ク无^ク機^一。
△寶主五位。主中寶、正中偏也。是^レ須^ク恁^モ麼^ニ來^テ以^テ顛^レ位^ヲ。

賓中主、偏中正也。是須恁麼去以明^レ宗。主中主、正中來。合^カ天理^ニ當^ニ人心^ニ。賓中賓、兼中至也。施^セ設^セ縱^セ橫^セ恐^セ无^レ処。兼中到。黑白未分已前過。

△功勳五位。向。造次轉沛只是々。奉。慤慤无^ニ米飯^一、堂前不問親^一共。此理若了全无事、体用何妨分与不分。共功。光境俱亡是何物。功々。佛祖未生空劫已前、偏正曾不墮有无機^一。

△王子五位。▲誕生。尊貴不施設、誰人分[□]名^一。▲朝生。四相——聖容。▲末生。高僧觸着當今諱、藏^ニ却^ニ花冠^一咲^レ一回。▲化生。風化无^レ傷^レ的^レ意^レ玄、光中有路天然異。

▲内生。玉簾深垂、全体未露。

本書の末尾には、「峨山二十一僧」「四向上」「石霜七去」の参が付載されている。本書とは直接には関係がないが、徹通義介（一二一九～一三〇九）に擬せられる物に『劫外録大乘開山徹通和尚之註』（西明寺蔵）がある。この書は貫之梵鶴の『真歇和尚劫外録抄』に「大乘云」として引用されており、体系的な五位の教義が展開されているわけではないが、五位の術語が散見し得る。両書は瑩山紹謹からの伝授の可能性を有する点で注目すべきかと思われる。

次に瑚海中珊（一三九〇～一四六九）のものとしてされる『七夜話』（六地藏蔵）を取り上げたい。瑚海は南英謙宗に師事した僧として知られる。本書は宝徳三年（一四五二）から享徳二年

（一四五三）に至る期間に記録された、主に『人天眼目』の公案や語句をテキストとした代語集である。五位に関連して言えば、次の記事が注目される。

「一 曹山録中秘訣新出、兼中圓明五位大意。

兼中円者、從正位之中不來、本來正故。從偏位之中不來、本來偏故。以卦爻不可論於陰陽。以圈兒不可論於黑白。以功用不可論於修證。以君臣不可證於尊卑。以主賓不可論能所。以人境不可論於背就。以内外不可論於出入。兼者兼前五位、円者每在其中。在正位則空圓也。如大虚无欠无余。在偏位則色圓也。如水銀落地各成團。在陰則黑圓也。如墨中煤難[□]。在陽則白圓也。如雪裡粉易弃。在日獨圓也。如水中塩味自知。在境則衆圓也。如色裡膠青不現。但此圓非方圓々、故不可指方処。本无損益。故无欠余。全兼五位、不可為六位。不墮意趣、故不可為玄妙。不論階級、故不為極位。但以圓一字談痛五位、故兼中圓也。已上」。

傑堂能勝・南英謙宗系統の五位説の根拠となったのは、如何なる典籍であったのであろうか。未だに必ずしも判然としてはいないように思う。その点からしてみても、ここに言う曹山録とは具体的には何を指しているのか、問題とされるべきものであろう。玄明從志編の『曹山録』及び性海による寛文八年刊行の『曹山録抄』については今後の課題としたい。

『人天眼目川僧抄』以前に成立した語録抄、いわゆる聞き書きの仮名抄は残念ながら管見には入っていない。今後鋭意蒐集に努力するつもりである。⁽²⁷⁾

次に川僧慧済の講義に参じた学僧によって記録された『人天眼目抄』について略述してみたい。遠州一雲斎三世川僧慧済⁽²⁸⁾(?~一四七五)の文明三年(一四七二)から同五年にかけて行われた講義の聞き書き抄とされるものが、現在三種類知られている。以下、外山映次氏の分類に従って論を進めたい。⁽²⁹⁾

甲類

某僧の聞書。要点を略記してまとめたもの。

○松ヶ丘文庫蔵本

三卷 乾坤二冊。天文五年(一五六三)写。

○足利学校遺跡図書館蔵本。

二卷二冊(上巻欠)。天正六年(一五七八)以前成立。

乙類

掛川に縁のある僧の聞書。講義に忠実な筆録。

○東大史料編纂所蔵本

八卷八冊。江戸中期書写。大徳寺派の僧春浦宗熙の識

語有り。

現在足利学校遺跡図書館蔵本と東大史料編纂所蔵本との比較検討を行っている最中であるが、概して後者の方が詳細であるものの、著しい当て字や誤字脱字が少なくない。相互に

相補える点で、川僧抄を考察する上で都合がいいと言える。次に川僧抄の影響を受けて成立した抄に、以下の三抄がある。

『人天眼目抄』

○西福寺蔵本

雷沢宗梭選述。天文三年(一五三四)才應繪藝書写本の永祿十年(一五六八)転写本。六卷六冊(上中下)。川僧抄の強い影響下に成立したものとされる。⁽³⁰⁾同種の別に長興寺蔵本がある。

○龍泰寺蔵本

写本一冊。雲門宗と曹洞宗部分の注釈(三冊本五山版の巻中に当たる)。川僧抄を継承するとともに、批判的検討を加えた上で自説を展開している。

○輪王寺天海蔵蔵本(『人天眼目聞書』)

三卷三冊。享祿五年書写。常州佐竹において天江東岳⁽³¹⁾の書写によるものか。

西福寺蔵本は、才應自身は天真自性派に属するが、川僧抄の外に椿庭海寿や大空玄虎の『碧巖録抄』を引用するほかに、臨済宗の所説も引用している。⁽³²⁾龍泰寺蔵本は、南英謙宗の説を引用している点で注目に値する。輪王寺本は、常州佐竹における洞門抄物作成の活動を考える上で貴重である。⁽³³⁾

このほかにもその系統は明らかではないが、幾つかの『人

天眼目抄』が知られている。

『石井積翠軒文庫善本書目』には次のように見える。

○『人天眼目抄』

三卷三冊。室町末期寫。

○『人天眼目抄』

三卷一冊。室町末期寫。卷首に「人天眼目仮名鈔之上」とある。ゾ式仮名抄物。

又、上村觀光『五山詩僧伝』にも、

○人天眼目抄 三冊 抄者不明

○人天眼目抄 六冊 越山晦照(ママ)

と見える。又『新纂禪籍目録』は、『人天眼目不二抄』を掲載するが、現存しないとされる。⁽³⁴⁾

江戸時代にはいると、萬安英種のもととされる『重修人天眼目綱領集鈔』が開板されている。⁽³⁵⁾江戸時代における『人天眼目』の受容については今後の課題としたい。

東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』について

石川力山氏は、洞門抄物の分類を行い、(1)語録抄、(聞書抄)、(2)代語(代・下語・著語)、(3)代語抄・再吟、(4)門参(本参・秘参・伝参・参・秘書)、(5)切紙(断紙)の五つに分類している。その定義によれば、「語録抄は、禪籍関係の典籍の注釈書であり、師家の提唱を会下の聴衆がそのまま

聞き書きした語録」であるとされる。⁽³⁶⁾そして上記の語録抄の典型とされているものが、本稿で扱う『人天眼目川僧抄』である。いち早くこの川僧抄に注目したのは国語学者であったが、彼らの関心は主として中世における口語資料としての価値にあった。石川氏の論稿において注目すべきは、特に東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』に言及して、「当時の叢林の日常生活と密接なつながりを持ちつつ行われた提唱の記録」であり、「教団の歴史の実体をも如実に伝える資料」と位置づけた点にあると思われる。⁽³⁷⁾

ここでは、東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』の性格を少しく明らかにしたい。先ず川僧の講義が何時行われたかについて考えてみたい。

(1) 文明三年辛卯十五日(卷一、三頁)

(2) 代云、端坐圓通微妙相、衆生眼裡青嶂堆。アツチガ

コチノ眼中へ来タソ。コチガアツチヘユケハ、逐境也

ト云。十月十七日觀音諷經ノ次。(七頁)

(3) 代云、勾萌甲拆自然生榮。十一月二日夜冬夜日也。

(三二頁)

(4) 抄云、諸尊宿処ハ且置、如何賓中賓。有僧、遊人不

入普門境。此著語ヲ引ソウタゾ。今夜觀音諷經ノ日ナ

程ニ、家々觀世音、十方諸国土、無刹不現身。コレラ

モヨカラウズト云ニ、代云、觀音菩薩、錢将来買胡

餅、放下乎元來是饅頭。(五一頁)

(5) 臘月一日、定坐ノ初日ノ茶礼也。(七十頁)

(6) 臘月十四日夜也。(七八頁)

(7) 代云、処々弥陀仏、家々觀世音。十七日觀音諷經。
(八一頁)

(8) 乃代云、去無方処、來無住処。カウ方互サシ玉へ。
節分夜也。(八四頁)

(9) 代云、五九尽日又逢春。立春ノ日也。(八五頁)

(10) 除夜。〈中略〉代云、家々門底夜胡兒。儼鬼。除夜
鬼ノ面ヲキテ拂ト云々。(九四頁)

(11) 代云、旧歲已去、新歲未來。正月上元日。(九五頁)

(12) 文明三年辛卯一二月十四日(一〇五頁)

(13) 文明四年壬申四月十四日。(一一一頁)

(14) 十五日茶礼晚間。(一二三頁)

(15) 代云、遊人不入普門境、只作青山綠水。十七日觀音
諷經ノ次也。(一二五頁)

(16) 代云、五月五日午時書、赤口白舌悉消除。(一四〇頁)

(17) 乃日、一念普觀音無量劫。五月十七日晚間觀音諷
經。(一七四頁)

(18) 代曰、何禪曰、六月滿天雪。師落合是ノ苦今宵夢ト
云々。六月旦茶礼。(二〇二頁)

(19) 文明四年六月五日臨濟宗商論了。(二二二頁) 已上、

臨濟宗

(20) 文明四年壬辰林鐘。(卷三、二一七頁)

(21) 代曰、使頭使下二人、一時奉事觀音。六月一七日ナ
リ。〈中略〉師云、今日老僧、於觀音前、挙三轉語、
報恩足矣ト云テ、問訊シテ帰方丈。(二三八頁)

(22) 文明四年六月廿一日了畢。清規次、塔中諷誦ノ次商
量。(二四七頁) 已上、雲門宗。

(23) 于時文明四壬辰年七月廿七日。(二九三頁)

(24) 霜月晦日夜ノ商量也。且ニハ一拶諸人、七日入定、
定ノ一句請一轉語。代、雪積凝玄路断、菴中不見倚門
人。(卷四、三三二頁)

(25) 代云、極月九日ノ夜也。皆句ノ切リヤウカワルイ
ソ。是ハ隔句対タホトニ、句ノキリ処カアルソ。(三二
九頁)

(26) 文明四年壬辰臘月十六日了畢。(三七四頁)
(卷五記載無し)

(27) 滄仰宗。同臘月十七日始。(卷六、四五九頁)

(28) 文明四年臘月晦日了。(五一〇頁)

(29) 冬至一拶、冬至月頭賣被買牛、冬至月尾賣牛買被。
正當冬至在月半、賣牛是買被是。代云、買賣不直價。
(五一二頁)

(30) 正月朔日、此ヨリハヤ万物出生スル程ニ、成相タソ

又一年三百六十日ノワメカ、臘月三十日万物凋零スル程ニ、壞相タソ。(五一五頁)

(31) 孟春十日了。(五四八頁)

(32) 文明五年癸巳正月一五日茶語マテ、法眼宗終。(五四八頁)

(33) 文明五年孟夏十四日始之。(卷七。五五三頁)

(34) 此ノ月ハ四月、来月ハ五月タト云ハズ、光陰虚ク度ルタソ。(六〇一頁)

(35) 師破曰、ハ五月十七日也、今日夕程、聞声悟道、見色明心、心觀世音菩薩、將錢来買胡餅、放下手曰元来祇是饅頭道ト云モ、露レヌソ。(卷八。六六二頁)

(36) 代曰、薰風自南来、殿閣生微涼。六月廿三日(七〇四頁)

(37) 搢云、人天ニ眼目タル有麼。代曰。千手千眼不審々々。六月十七日觀音諷經次。(七一四頁)

(38) 文明五癸巳年六月十九日了。(七一六頁)

聴衆を前にしての『人天眼目』の本文の解釈とその確認及び商量としての搢語・代語と言う形式は、川僧抄では一貫している。東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』では特に僧堂の雰囲氣をビビッドに伝えてるように思われる。それは季節の移り行きや折々の行事を念頭に置いた川僧の代語がしからしめるものと思われる。そして、このような『人天眼目』の

講義における代語は、ある意味で上堂に変わる意味合いを持つものと言ふことが出来るであろう。

又、上記のような行事としての講義とは別に、抄者が入室參禅していることが窺われる。それは屢々「有密參」の記事が見られることによつて明らかである。

次に本抄に引用される『人天眼目批卻集』について考察してみた。

(1) 人天眼目批却云、師家無鼻孔、主中賓ト云タワ、ヲカシイゾ。克符答話ヨリミレハト云々。(五三頁)

(2) 師曰、批却ニハ、寂音、岫雲外ハ、浮山ヲ罵タソ。狐狼猥執、不レ可レ称ニ獅子ニ云云。(一一七頁)

(3) 批却ハ、円頓ハ法華、半満ハ涅槃説也。(一四八頁)

(4) 師曰、是カ前ヘノ臨濟ノ示衆ニチガウタホトニ、家ノ批却ニハ、門庭三ツノ誤ノ一ツ也。師家有^ル鼻孔、名^キ主中主、学人有^ト鼻孔、名^キ賓中主、師家無鼻孔、名^キ主中賓、学人無鼻孔、名^キ賓中賓。師曰、是レカ批脚ニヲカシイト云タソ。是ニツノ誤也。(二〇七頁)

(5) 師語話ノ云、一方ムキニ、人ハソシルマチヒソ。太源派ノ僧ワ、通幻派ヲ窮メ、通幻派ワ太源派ヲ窮テコソシラウスレ。五宗批却云、山堂ヲシタカニイマシメテワルク道タソ。五宗批却ハ、岫雲外ト云、源清流不濁、根茂枝枯、又證拠多引タソ。(二四四頁)

『人天眼目批郢集』は、東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』では、「批却云」「五家批却」「五宗批却」の書名で引用され、足利学校遺跡図書館蔵本では、「五宗批判」「五宗批却」として引用される。川僧の引用態度は、概ね批判的検討が加えられた上での引用と考えられ、是々非々の態度で臨んでいる。具体的には拙稿を参照していただきたい。⁽³⁸⁾

次に東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』に最も多く引用される先行文献として別種の『人天眼目抄』があったことを指摘したい。川僧は屢々その典拠や解釈を参考にしており、恐らく先師からの伝授を受けているものと思う。

(1) 抄ニ截断衆流ナンド、シタレトモ、サワアルマシヒソ。只モタケス、ム字ノマ、ミヨト云云。擡薦ハ人ヲ引立テタル心也。此筋目ニ擡ケス、ムルガ面白ソ。頂門直上シツ看ナント、キラメカスハ、嘆、北中和尚ノ時看ト云事ヲスイテ、皆道タヲ、真岩和尚ハキタナイト被仰テ、ツイニ不仰ナリト云云。密モコレヲ刪タソ。(二二四―五頁)

(2) 次出ニ物語リシテ聞カセウ。梅山和尚ノ江上晚来堪晝処、漁人披^{キヨ}得^{キヨ}一蓑帰ト被^{キヨ}仰。如中和尚ノ云、先師ノオシナツタコトナレトモ、披得^{キヨ}一蓑帰ルテコソアラウレト云云。(三二六―七頁)

(3) 語話シテ云、昔老僧達ノ物語リアツ、ル、天真和尚

大東急記念文庫蔵『人天眼目批郢集』について(飯塚)

ハ、古則ヲシラヘテ、シメテ、ソノマ、御代モナクテ、御置アリシト云云。(五七一頁)

上記のように真岩道空、梅山闍本、如仲天闍、天真自性等の名が見える。このほかに、「古徳云」としての引用が見られ、種月南英謙宗の『重離疊変訣』、了庵慧明の説の引用等が見られる。

今後の課題としては本稿では扱えなかった五位関係の切紙・門参との連関性を明らかにすることである。更に川僧抄にも濃厚にうかがえる易学の影響をどう理解するかという事も大きな課題である。東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』でも曹洞宗関係の処では勿論、他宗の部分でも易による解釈を行っている。今後はより内容を参究する形で研究を続けたいと思っている。

註

- (1) 中田祝夫『人天眼目抄』(勉誠社)の頁数による。
- (2) 五位関連の著作は、江戸期以降盛んに開板されているが、五位を全面的に批判した著作は極めて稀である。『永平破五位辨』(永久文庫6561)
- (3) 龍谷大学蔵『大徳寺夜話』。拙稿『大徳寺夜話』について―養叟会下の記述を中心として―(『宗学研究』三四号。一九九二・三・三一)
- (4) 春浦宗照は、林下大徳寺派の主流を成した養叟宗頤の法

嗣。五山叢林との密接な交流を持ち、その語録『春浦金口説』には五山僧との詩文の応酬が見られる。同時期に活躍した一休宗純(養叟とは兄弟弟子に当たる)の門下にも曹洞宗の僧侶が参じている事が確認できる。(↓『自戒集』、叡山文庫蔵『碧岩休偈記』等)。『碧岩休偈記』の奥書によれば、「竜江院開山秀峯存偈書記、於紫野一休下参得之也」とある。

(5) 『人天眼目批郤集』は、『人天眼目』に対する批判の書であることは、書名より明らかであるが、『人天眼目川僧抄』に引用されて以降、長興寺・西福寺蔵本にその書名が見えるのみであり、以後依用されなくなったと推定される。

(6) 石川力山「峨山和尚誦抄『自得暉録』について」(『宗教学論集』第九集、一九七九・一二)石川論文に依れば、本抄は峨山の『山雲海月』で説かれる五位解釈に近似するとして、また『山雲海月』の五位説の内容も『五位者、兼中到・兼中至、此兩位也』とあるように兼中至・兼中到を中心とする、功勳的な内容を持つに至った石霜五位と見て差し支えない」と言う。

(7) 石川力山「眞州長蘆了禅師劫外録抄」の研究(上)(中)(下)」(『駒澤大学仏教学部論集』二五・二六・二七号)

(8) 納富常天『天童小参抄』。靈松院蔵『天童小参抄』(室町時代写本、上下二冊、但し上冊を欠く)の影印と翻刻。本抄の奥書に「應永二十八季十月廿八日、以大智注解、重微細注之。宗門大事了畢之後、嗣法堂奥之輩、竊可頂戴者也。大智注解大意之貳卷、別而有之。慧明在判。今康永三季七月十日、某僧稟先師堂奥之種草、於相州最乘禅寺戴之。一々参見

委悉後、被覽之者也。了庵慧明敬白」と見え、本抄が大智の注釈を基に、更に注釈を施したものであり、別に『大智抄』とも言うべきものが在ったことがわかる。本抄は、「云注、廓注ノ隱身ノ術トハ、兼中至ナリ。争似全身在帝卿。注云、兼中到ナリ」(二三頁)「カリニ寶主・凡聖・君臣ノ位ヲ分ツ時、洞山功勳五位、向・奉・功・共功・功々ノ五位有り。故ニ宏智禅師、此意ヲ得テ、君臨ニ臣位、有功奉之儀。功勳之迹ナシト雖モ、君臨臣、向・奉・功・共功、修道明功ノ旨ヲ分ツ、是ヲ弁別スヘシ」とあるように、功勳五位が解釈の基調となっていることがわかる。又、静岡県最福寺・長野県大安寺蔵『天童小参抄』は、「総持二代和尚下語」と見え、峨山韶碩の名が冠せられている。「正中偏云、天共白雲曉(注云、是ハ、正中ニ兼偏也。正中偏ワ、無語中ノ有語也。却来ナリ)。偏中正云、水和明月(注云、偏中テ帶正也。偏中正者、有語中之無語也。不来ナリ)。正中来(注云、正覚云、莫道鯤鯨翼、今日親從鳥道回ト云ニ、正中来ワ、無語中ノ無語也。向去ナリ)。兼中至(注云、師云、當機不廻互、敵面無レ后先。兼中至ワ、有語中ノ有語也。不去ナリ)。兼中到(注云、師云、宝殿無人不侍立、不種梧桐免鳳来。兼中到ワ、不涉有語無語、不落ニ龜細、去来人境」。(最福寺蔵『小参之抄総持二代和尚下語』)

(9) 石川力山「古今全抄について」(『印度学仏教学研究』二七卷二号)。外山映次「古今全抄とその用語」(『近代語研究』一九七七・三)安藤嘉則『無盡集』について(『宗学研究』三二号、一九九〇・三)同『無盡集をめぐる諸問題につい

て」(『宗学研究所紀要』三三三。一九九〇・三)

(10) 本参においても、五位は取り上げられる事が多い。大谷大

学蔵『敲門瓦集』には、『人天眼目』に見える五種類の五位説が取り上げられている。例えば、天真派の長興寺に蔵されている『上々の参得』には、「五位。師云、正中偏・々中正ヲ

一句ニ。代云、三世諸在不知、狸奴白狐還有知。私云、偏ヲ

ツムレバ、其ガ臆テ正也。呈ニ、正ノ后ガ偏、々ノ后ガ正、

二ツ無キヲ也。正位雖為正還偏、々位雖為偏還正也。引離シ

テ見エト也。正中偏・々中正ト云テ、正ノ中ニ偏ガ在リ、偏

ノ中ニ正ガ在ルテヲ無キ也。正ノ后ガ偏、々ノ后ガ正也。代

云、代モ三世ノ諸佛ヲ、尽シテ至ル方ナ呈ニ、偏位也。狸奴

一狐ヲ、其ノ儘ノ本智正位也。呈ニ、此ノ句ヲ、智全不知、

々々全知也。全知ト云ワ、根本知也。狸——狐ヲ、根本智具

足也。サリナカラ推シツメテ見レハ、一位也。師云、正中來

ヲ。代、吐出難レ弁。心ワ、産出ノタタチノヲ也。ヒヨツト

産出ノタ、チワ、更如何トモ弁白ワ出テ間敷也。是レハ、古

人ガ正——來ノ著語ニシタレトモ、古エヨリ付來タ呈ニ、如此

也。師云、兼中至・兼中到ヲ一句ニ。代云、夜明簾外主サエ

偏正ノ方ニ隨ヌニ、況ヤ此ノ句ヲ、功位ノ沙汰ニ云則ンハ、

ノ簾外ノ主ト云ハ、トツト高ク取也。在レトモ、爰テワ、兼

モ、嫌イツメテ於ク也。正得兼中至ガ、功極ノ処、宗旨免蔵

テ、爰ヨリ上ワナキヲナレトモ、走云エハ、タツハクニナル

呈ニ、到ト云ガ、猶ヲ在ル有ク也。爰ガ、宗旨ノ畢竟也。

心得大切也」のように見える。拙稿「長興寺蔵の本参資料に

ついて」(『宗学研究所紀要』一〇。一九九六・一〇)

(11) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)」(『駒澤大学

仏教学部紀要』五〇号)。拙稿「潔堂派所伝の切紙について」

『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』二九号)。石川論文にお

いては、各派に伝承されてきた五位に関する切紙全般を取り

上げており、拙稿は、寒巖派下の潔堂派に伝写されてきた、

十五世紀末成立の切紙を取り上げたが、その中にも五位を解

釈した切紙が見られる。

(12) 石川力山「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫年報』

二号、一九八八)。石川論文に以下のように言う。「室町中期

以降の洞門抄物が、『碧巖録』『無門関』、あるいは『臨濟録』

『大慧書』といった、洞済の別にあまりこだわらない典籍を

素材とする場合が多いのに対して、初期の曹洞宗教団内で成

立した典籍の素材となったものは、義介の『劫外録』をはじめ、

峨山韶碩の『自得暉録抄』等、中国曹洞宗関係のものが、

その殆どを占める。〈中略〉当時の禅宗界において曹洞宗と

して命脈を保っていたのは、宏智派であり、曹洞宗の宗旨と

されていたのは、五位説であった」。

(13) 拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」

『曹洞宗研究員研究紀要』二七号、一九九六・七)

(14) 「〇五宗批却云、三隨之起、藉維摩經焉。維摩所訶、在須

摩、嫌イツメテ於ク也。正得兼中至ガ、功極ノ処、宗旨免蔵

テ、爰ヨリ上ワナキヲナレトモ、走云エハ、タツハクニナル

呈ニ、到ト云ガ、猶ヲ在ル有ク也。爰ガ、宗旨ノ畢竟也。

心得大切也」のように見える。拙稿「長興寺蔵の本参資料に

ついて」(『宗学研究所紀要』一〇。一九九六・一〇)

(11) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)」(『駒澤大学

仏教学部紀要』五〇号)。拙稿「潔堂派所伝の切紙について」

『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』二九号)。石川論文にお

いては、各派に伝承されてきた五位に関する切紙全般を取り

上げており、拙稿は、寒巖派下の潔堂派に伝写されてきた、

十五世紀末成立の切紙を取り上げたが、その中にも五位を解

釈した切紙が見られる。

(12) 石川力山「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫年報』

二号、一九八八)。石川論文に以下のように言う。「室町中期

以降の洞門抄物が、『碧巖録』『無門関』、あるいは『臨濟録』

『大慧書』といった、洞済の別にあまりこだわらない典籍を

素材とする場合が多いのに対して、初期の曹洞宗教団内で成

立した典籍の素材となったものは、義介の『劫外録』をはじめ、

峨山韶碩の『自得暉録抄』等、中国曹洞宗関係のものが、

その殆どを占める。〈中略〉当時の禅宗界において曹洞宗と

して命脈を保っていたのは、宏智派であり、曹洞宗の宗旨と

されていたのは、五位説であった」。

(13) 拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」

『曹洞宗研究員研究紀要』二七号、一九九六・七)

(14) 「〇五宗批却云、三隨之起、藉維摩經焉。維摩所訶、在須

摩、嫌イツメテ於ク也。正得兼中至ガ、功極ノ処、宗旨免蔵

テ、爰ヨリ上ワナキヲナレトモ、走云エハ、タツハクニナル

呈ニ、到ト云ガ、猶ヲ在ル有ク也。爰ガ、宗旨ノ畢竟也。

心得大切也」のように見える。拙稿「長興寺蔵の本参資料に

ついて」(『宗学研究所紀要』一〇。一九九六・一〇)

(11) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)」(『駒澤大学

仏教学部紀要』五〇号)。拙稿「潔堂派所伝の切紙について」

『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』二九号)。石川論文にお

いては、各派に伝承されてきた五位に関する切紙全般を取り

上げており、拙稿は、寒巖派下の潔堂派に伝写されてきた、

十五世紀末成立の切紙を取り上げたが、その中にも五位を解

釈した切紙が見られる。

(12) 石川力山「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫年報』

二号、一九八八)。石川論文に以下のように言う。「室町中期

以降の洞門抄物が、『碧巖録』『無門関』、あるいは『臨濟録』

『大慧書』といった、洞済の別にあまりこだわらない典籍を

素材とする場合が多いのに対して、初期の曹洞宗教団内で成

立した典籍の素材となったものは、義介の『劫外録』をはじめ、

峨山韶碩の『自得暉録抄』等、中国曹洞宗関係のものが、

その殆どを占める。〈中略〉当時の禅宗界において曹洞宗と

して命脈を保っていたのは、宏智派であり、曹洞宗の宗旨と

されていたのは、五位説であった」。

(13) 拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」

『曹洞宗研究員研究紀要』二七号、一九九六・七)

(14) 「〇五宗批却云、三隨之起、藉維摩經焉。維摩所訶、在須

摩、嫌イツメテ於ク也。正得兼中至ガ、功極ノ処、宗旨免蔵

テ、爰ヨリ上ワナキヲナレトモ、走云エハ、タツハクニナル

呈ニ、到ト云ガ、猶ヲ在ル有ク也。爰ガ、宗旨ノ畢竟也。

心得大切也」のように見える。拙稿「長興寺蔵の本参資料に

ついて」(『宗学研究所紀要』一〇。一九九六・一〇)

(11) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(十九)」(『駒澤大学

仏教学部紀要』五〇号)。拙稿「潔堂派所伝の切紙について」

『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』二九号)。石川論文にお

いては、各派に伝承されてきた五位に関する切紙全般を取り

上げており、拙稿は、寒巖派下の潔堂派に伝写されてきた、

十五世紀末成立の切紙を取り上げたが、その中にも五位を解

釈した切紙が見られる。

(12) 石川力山「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫年報』

二号、一九八八)。石川論文に以下のように言う。「室町中期

以降の洞門抄物が、『碧巖録』『無門関』、あるいは『臨濟録』

『大慧書』といった、洞済の別にあまりこだわらない典籍を

素材とする場合が多いのに対して、初期の曹洞宗教団内で成

立した典籍の素材となったものは、義介の『劫外録』をはじめ、

峨山韶碩の『自得暉録抄』等、中国曹洞宗関係のものが、

その殆どを占める。〈中略〉当時の禅宗界において曹洞宗と

して命脈を保っていたのは、宏智派であり、曹洞宗の宗旨と

されていたのは、五位説であった」。

(13) 拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」

『曹洞宗研究員研究紀要』二七号、一九九六・七)

(14) 「〇五宗批却云、三隨之起、藉維摩經焉。維摩所訶、在須

摩、嫌イツメテ於ク也。正得兼中至ガ、功極ノ処、宗旨免蔵

テ、爰ヨリ上ワナキヲナレトモ、走云エハ、タツハクニナル

呈ニ、到ト云ガ、猶ヲ在ル有ク也。爰ガ、宗旨ノ畢竟也。

心得大切也」のように見える。拙稿「長興寺蔵の本参資料に

ついて」(『宗学研究所紀要』一〇。一九九六・一〇)

菩提、彼須菩提、偏修三解脱、不希求大乘、厭大患之身、棄諸累之智、永入正位、不復續生。維摩大師、具大方便、接樓解脱深坑、呵責其位。々々若改者、敗種必萌矣。曹山禪師、借彼經意、鞭乎後人、蕩尽凡情聖見、欲令得禪悅食。曹山云、凡情聖見、是金鎖玄路、直須回互、々々——言、一看疎浮、三復激然、孔有好意、如斯三墮、以回互之故、来去無碍、方見曹山之端倪焉。且類墮二墮分明而會。尊貴一墮、請試論之。夫尊貴墮者、若兼中到及一切種智、依淨名經故、且一舉二智徵。雖是尊貴、曾無墮義、則置而不論。若正中来及一切種智、有一分墮義、故小品云、墮二乘地是也。然墮之意与今別也。若約偏中至及道種智、則以出仮為尊貴墮、何以知邪。經云、謗於仏、毀於法、不入衆數、終不得滅度、从空、汝若如是、乃可取食。大珠禾上云、終不得滅度者、智用現前。寂音道、此尊貴墮之所由立也。明安曰、須知那辺了、却来者辺行李、与麼則不得滅度、却来者辺、正是尊貴墮。依無住本、熾然建立、於第一義、而不動焉。古人云、默時説々時默、豈欺人哉。蓋曹山禾上、雖有二墮之解、尊貴一墮、含時弗説。若具言之、夫冥合初心而知有、是類墮。知有而不得六塵、是隨墮。不碍六塵、終不得滅度、是尊貴墮。只為無尊貴墮之註解。若心得諸師之異解也。夫墮者、曹山自云、不被佗染汚將尊墮。且不是同也。是知三墮一揆、無有差異。那故尊貴一墮、或云、独坐孤峰頂、輪蹄絶往還。或云、畫堂無鎖鑰、誰敢跨其門。此是独善之人、空生所便、全非淨名、曹山意焉。若自望雲霄、足不到人間、有甚墮論不染乎。直饒於輪蹄絶往還之处、不被佗染汚、雖成墮義、此則寂音所頌、恐不

是淨名、曹山之意也。寂音云、自着珍御、顧見何驚異。噫不驚異、稍可也。争奈不着弊垢衣。若不着弊垢衣、回互之言、可謂、好心無好報焉。且質寂音、目為帝王家、為是兼中到及一切種智。當為正中来及一切智者、將復中偏至及道種智、珍御、太所不応也。若正中来及一切智者、淨名彈呵、有甚所用、曹山回互、不復思察。若兼中到及一切種智者、寂音既自云、終不得滅度者、是尊貴墮之所由立也。此成自語相違之咎、今以三智五位、而徵檢推覷。寂音帝家聿不得合古轍、未審、名什麼処帝王家。若不能端的、難生后昆之信。又諸墮各自心、當位不更回互。何以言蕩凡情聖見乎。（東大史料編纂所藏本、四三九～四四六頁）。

(15) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜稿』（春秋社、一九九三・二。四五～四八頁）。

(16) 桃源瑞仙の『周易』の講義録である『百衲襖』は、五山における易学の集大成と言える。この時期足利学校においても盛んに易学が講じられており、その抄物が残されている。因みに柏舟宗趙は永享十二年足利学校で庠主快元について学び、武蔵箕田で希禪に易学を学んでいる。柏舟は後に近江曹源寺の住持となり、横川景三、景除周麟に『周易抄』を伝授している。桃源も亦た柏舟宗趙の所説を参考にしていたことを『百衲襖』において述べている。更に桃源は『周易啓蒙通釈』を清原業忠に受講している。林下道元派下の僧侶が五山や足利学校の講席に列して『周易』を学んでいたであろう事は、『頭訣耕雲注種月攘掖稿』や愛知県常光寺藏の潔堂派切紙等によっても裏付け得る。

(17) 「又周易云、大極生一易、々々生二儀、々々生四象、々々生八卦云也。大極ハ易道ノ至理也、至無也。朱子注云、大極ハ心也」(長興寺蔵『人天眼目抄』巻下)

(18) 岩井大慧「麗板『人天眼目』とその種々板考」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』一九六一・六)。椎名宏雄「『人天眼目』の諸本」(『宗学研究』二〇号、一九七八・三)。同「高麗版『人天眼目』とその資料」(『駒澤大学仏教学部紀要』四四号、一九八六・三)。

(19) 管見に依れば、室町時代末期の写本と思われるものに、大東急記念文庫蔵本(上中下三冊)、駒澤大学図書館蔵本(中下冊、上冊を欠く)等がある。

(20) 椎名宏雄「六地藏寺所蔵禪籍目録及び解題」(『書誌学』復刊二六・二七号、一九八一・五)。注(13)拙稿において『一華開五葉』の全文を翻刻した。参照していただきたい。

(21) 峨山韶碩の名が冠せられている抄物類には、本稿で取り上げる『一華開五葉』の外に以下の物がある。(1)大東急記念文庫蔵『峨山百則』(筆者未見)(2)静岡県最福寺蔵『小参之抄』(総持二代和尚之下語)(3)長野県徳雲寺蔵『峨山和尚一枚法語之参禅』(4)熊本県円応寺蔵『自得暉録抄』等がある。上記の物については、別稿において考察する予定である。既に石川力山氏が指摘するように、円応寺蔵の『山雲海月図』においても、峨山会下及び峨山派下の著語等が増補された可能性が高く、『山雲海月図』の本参部分に取り上げられた公案が『一華開五葉』にも見出せるが、著語は一致しないなどの問題が存する。石川力山「肥前円応寺所蔵の『山雲

大東急記念文庫蔵『人天眼目批郢集』について(飯塚)

海月図』について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一―一―一九七九・八)。椎名宏雄「峨山におけるカナ法語の性格」(『宗学研究』一九号、一九七八・三)同「仮名法語の展開」(曹洞宗宗学研究所編『道元思想の歩み2』一二八―一五四頁、一九九三・七)注(7)参照。

(22) 注(7)(12)参照。

(23) 金田弘「天真派貫之梵鶴の抄」(『浅野信博士古稀記念國語學論叢』一九七七・一〇)。金田論文は、洞門抄物類において、天正元年ごろを前後する五十年ほどを境として質的变化が見られるとして、「天文・弘治以前のカナ抄は、参禅の必携書ともいふべき『碧巖録』『人天眼目』『無門関』などの三書を主とする注釈がもっぱらであるのに天正以降になると、いわゆる『門参』『秘参』、および『代語抄』というものが現われて、前記のカナ抄に交代した形で広く行なわれるようになったと指摘されている。本稿で扱う所謂『人天眼目川僧抄』は、峨山派太源派下の語録抄として位置づけられ、その影響下に成立した長興寺蔵の『人天眼目抄』は、通幻派天真派下の抄物として位置づけ得る。この両派においては、『人天眼目』の外、『碧巖録』『無門関』の注釈書が多く残されている反面、『門参』の類が極めて少ないという特徴を有している。

(24) 西明寺蔵『劫外録大乘開山徹通和尚之註』には、「瑾首座書之」(文正二年七月日、於如意庵書之)と見える。注(7)参照。

(25) 注(20)参照。

(26) 大智の抄とされる『古今全抄』にもこの則は引かれる。「六

十一、曹山録中祕訣新出兼中圓明、々五位大意。注云、圓ト

云ウワ、中也。五位共ニ、中ヲ兼ヌ故ニ、兼中圓ト云イ、亦タ

ハ五位ノ大意ヲ明ト号ス。兼中圓者、從正位之中不來、本來

正ナルガ故也。本來ノ正ト云ワ、孤單頑然ノ正也。故ニ正位

ノ中ヨリ不來、從偏位ノ中不來、本來偏ナルガ故也。本來ノ

偏ト云ワ、偏孤ノ偏也。古人云、偏位却テ正ト云ワ、孤單ナ

ルガ故ニ、偏位却正ト云。曾以偏正邊、不可混雜。孤單ノ正

ガ聽テ偏孤偏。全甲乙不可有。此ノ一位ヲ本有天然ノ正位ト

名ケ、中ノ圓トモ号ス。五位トモニ、此ノ一位ヲ種子ス。故

ニ正中偏ヨリ兼中到マデ皆ナ中ヲ兼ヌ故ニ云フ、兼中圓ト。

此ノ本來偏正ワ、不干陰陽偏(正)。故ニ以卦爻不可論陰陽。

六卦ノト落トシテ、陰陽ノ方ニ不可落。又タ以圈兒不可論修

證。々々ノ功以可論非一位。故本有天然ノ位ト号ス。以君臣

不可論尊卑。云、偏正君臣ノ位階級ニ不屬。故以君臣不可論

尊卑。以主賓不可論於能所。以人境不可論与奪。以理事不可

論於背就。以内外不可論出入。注云、主賓・人境・理事・内

外、何レモ功用・偏正辺ノ事也。此ノ一位ワ、孤單頑然ノ正

位ナル故ニ、諸方ノ正偏智覺ニ不墮。尊トワ兼前五位、圓者

每位有其中、故円ト云。サテコソ、一中正位有則ンバ、空円

也。如大虚無欠無餘在偏位則ンバ、色円也。如水銀落各團、

雖有色中、中ヲ不失。在陰則バ、黒円墨中ノ煤難弁。在陽

則、白円如雪裡粉不辨。陰位陽位共ニ中ヲ不失。此レヨリ下

モ亦如此ノ。只タ此ノ円非方円、故ニ不可指方所。本無損

益、故不可論欠餘。全兼五位、故不可為六位。不墮意趣、故

不可為玄妙。不論階級、故不可為極位。只以円一字、該通五

位。注云、所謂君臣以偏正——犯。此一中則一円也。先ニ云

ガ如、此レ孤單ノ正也。偏孤ノ偏也。中ノ体ワ、不偏不正故

ニ、孤單ト云イ、偏孤ト云也。如兼中円也。注云、兼中円如

何承当。云、全起無影跡、不墮古今機、云云。(京都大学付

属図書館蔵『古今全抄』)

(27) 京都大学付属図書館蔵『人天眼目抄』(室町末期写本、全一

冊)は、その成立が応永年間である可能性がある。「淳熙十

五年ニアタル。日本高倉院承安四年ト同ク合フ。今日本ノ応

永卅六年也」。

(28) 外山映次「遠州一雲齋三世川僧慧濟禪師年譜稿」(『埼玉大

学紀要教育学部』二四号、一九七六・三)。

(29) 外山映次「二つの人天眼目抄」(『川瀬博士古稀記念』國語

國文学論文集』三一七―三三五頁)。

(30) 金田弘「川僧慧濟と『碧巖録抄』」(『洞門抄物と国語研究』

三九―六〇頁。一九七六・一一)。金田論文に依れば、西福寺

蔵本は、「一雲抄(川僧抄)」の引用が多く見られ、その引用

態度は、(イ)肯定的引用(ロ)否定的引用(ハ)対比的引用

に分類できるとした。注(29)の外山論文は、その説を継承し

つつ、西福寺蔵本全般にわたる詳細な分析を施している。今

後の課題としては、その説の適否を含めて、解釈の問題につ

いて考察する必要があると思う。雷沢宗稜の抄とされる西福

寺蔵本・長興寺蔵本は、「一雲抄」に依拠するところ大であ

るが、「私云」として自説を展開することも多く、他の抄の

引用においても批判的検討を経た上での解釈と考えられる。

注(13) 拙稿において、東大史料編纂所蔵本、足利学校遺跡図書館蔵本、長興寺蔵本の三本を比較対照を行った。参照していただきたい。

- (31) 金田弘「天真自性派と『無門関抄』」(『洞門抄物と国語研究』六一〜八一頁)及び注(23)参照。拙稿「貫之梵鶴代語抄」について(『宗学研究』三八、一九九六・三)。外山論文は、西福寺蔵本が「一雲抄」として引用するものは、甲類に近似することを指摘している。松ヶ岡文庫蔵本は、上野金竜寺において書写されている。金竜寺は、東上野における天真派の拠点寺院であり、雷沢宗梭(機堂派下)才應総藝(希明派下)も亦た天真派に属することを考え合わせるならば、西福寺蔵本の基になった「川僧抄」は、即ち甲類は、同派において伝写されてきたテキストと考えてよいと思われる。

- (32) 「木杯碧岩抄」云、清涼寺在石頭城、臨揚子江上(長興寺蔵『人天眼目抄』巻下、二丁表)。「石門聡云、山河大地。境ヲ立スル時、人ヲハ奪也。大空和尚破云、手ナツケン(巻上、七丁表)。「関山和尚臨濟録之抄云、踞——不露爪牙、不施威勢、而欲驗学者之来風ノ義、此説最親切也(巻上、一五丁表)。金田弘「国語資料としてみた〈国学院大学図書館蔵〉『木杯餘瀝(碧岩口義)』」(『國學院雑誌』一九七三・三)。同「碧巖大空抄」と円成寺蔵『虎蔵主碧巖(抄)』(松ヶ岡文庫研究年報』一号、一九八七)。

- (33) 土井洋一「抄物の転写本と版本」(『学習院大学研究年報』一三号、一九六六)。柳田征司「日光天海蔵蔵『人天眼目聞書』と常州佐竹における抄物作成活動」(『愛媛国文と教育』

二六号、一九九四・一〇)。土井忠生蔵『人天眼目抄』(上中下三冊、写本)の奥書には、「于時永喜二年丁亥於常州佐竹書之」とあると言う。

- (34) 中田祝夫「『人天眼目抄』解説」(『抄物大系』人天眼目抄)。
(35) 金田弘「万安英種の『永平元禪師語録抄』と『人天眼目抄』」(『洞門抄物と国語研究』一二二〜一三五頁)。
(36) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(一)」(『駒澤大學佛教學部紀要』四一号)。同「曹洞宗における抄物の成立と展開」(『道元思想の歩み』一九九四・三)。同「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫文庫研究年報』二号、一九八八)。金田弘「国語資料としての曹洞宗カナ抄物類とその性格」(『洞門抄物と国語研究』七〜三五頁)。

- (37) 石川力山「『人天眼目抄』について」(『印度學仏教學研究』二六卷二號、一九七八・三)。

- (38) 注(13)参照。